

平成24年度 熊本市食の安全安心・食育推進会議 第1回計画策定部会（食育推進）  
議事概要

開催日時 平成24年8月10日（金） 14:00～16:00

場 所 熊本市役所本庁舎13階会議室

出席委員 10名（五十音順・敬称略）

秋吉澄子、伊藤大介、江頭隆一、川瀬修一、木村彰宏、清川光乃、上妻美由紀、  
小山和作、中川朗子、森田啓二（欠席2名 石井孝文、清田賢治）

傍聴者 なし

次 第 1 開 会

2 主催者挨拶

3 部会長選出 小山和作（互選）

4 議 題 議題1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート(速報)について  
議題2 第2次食の安全安心・食育推進計画(骨子案)について  
議題3 その他

5 閉 会

会議資料 資料1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート（速報）

資料2 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画(骨子案)

資料3 第4章「食育の推進」に関する施策体系(案)

資料4 熊本市食の安全安心・食育推進計画 施策の方向性と成果指標 評価シート

### 議事録（要旨）

【議事進行】 部会長 小山和作

《事務局》

議題1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート(速報)について（資料1）説明

《小山部会長》

速報に関して皆様からご意見・ご質問ないか。

《中川委員》

知ってはいるが実践していないというのが伝わってくるアンケート結果だと思う。推進計画の骨子案は体系の中にも若干出てくると思うが知ってはいるが実践していないということで周知徹底、広報の部分は市民レベルに伝わっているが、具体的にそれを家庭や職場でどのように具体的な行動につなげていくのが食育なのか、あるべき食生活なのかというのが分かりにくい。体系とか骨子案とか予算の肉付けをされる場合に、食育を実践に移すきっかけになるような事業やイベント中心に予算を持っていったほうが良いのではないか。あとで体系の中にも出てくると思うが、具体的に職場で食育の推進をサポートする人材の育成などが出てくるので、その面にも反映されていると思うが、ぜひ具体的な市民の食育への行動のきっかけ作りになるような行政の働きかけなり支援策なりというものを強化して欲しい。

《事務局》

委員のご発言の通りで、国のほうも周知から実践へということで、言葉は簡単だが重たいところである。それぞれ事業展開をしてきたが実践というデータはアンケート結果でも良い方向にっていない。ご指摘のことも踏まえて、関係各課に協力いただき計画策定作りに向けて知恵を絞りながら、行動変容

について考えていきたい。

《清川委員》

今の意見に似ているが、私もこのアンケートを見て、参加したいが参加できない、関心があるけど参加できない人が大勢いると思う。会社や勤務先でイベントや研修会を持てたらと思う。地域のボランティアでは0歳から3歳の親子や高齢者はたくさん来られるので、その方たちに食育のお話はできるが、若い人たちは土曜日曜もなかなか集まらない。働いている人に食育の話をするためには勤務先・会社などで講演会等を実施したほうが良いと思う。

《小山部会長》

年代的になかなか食育というものの普及・啓発にムラがある。学校等はそういう教育を一生懸命している。しかもお母さんたちは自分の子どもという事で関心がある。しかし、そうでない人たちは関心が少ない。

中川委員の発言のように知っているけどしないというのは、しないなら知っていないのと一緒である。他にご意見はないか。

《森田委員》

質問だが、22ページの14歳以下の児童の保護者にとられたアンケートで『朝食を食べない最も大きな理由は何ですか』という質問に対して『以前から食べる習慣がない』というのが17.4%いる。これは上の『週4~5日食べる』『週2~3日食べる』『ほとんど食べない』のどれに対しての17.4%なのか。

《事務局》

今委員が言われたのはn=115であるが、上の設問の答えで『食べない』もしくは『ほとんど食べない』を選んだ人に『食べない理由』を具体的に聞いたらこの答えだったということである。件数も含め次回の最終報告の中では数値も明確に出したい。

《小山部会長》

お母さんや家が忙しければそこまで気が回らない。子どもが食べないなら食べないでいいというのは現実にはあるのではないか。

《森田委員》

子どもに聞くと、「用意してなかったから」と答える子どももかなりいる。本校はある程度高学年になったら「自分で用意して食べてきなさい」と言っているが、家庭の保護者で「準備できない」とか、「食パン一枚食べて行きなさい」というのが子どもを通して学校で聞かれる。

《小山部会長》

これは熊本市の話ではないが、子どもたちが朝食を摂らない率を小学校でとって、同じ事を保護者にアンケートをとったら大体一致する。食育というのは小中学校に関しては子どもたちより親たちが問題だと思う。今の30代後半のお母さんたちは勤めていて仕事に忙しいから自分もご飯を食べない人が多い。学生はどうか？

《秋吉委員》

学生も食べてこない人が多い。うちは栄養士を目指す学生なのでほかの学生よりも食べていると思うが、それでも食べてこない人は多い。

《小山部会長》

理由はやっぱり前から食べないからということか。

《秋吉委員》

朝起きられないとか時間がないとかだと思う。

《小山部会長》

朝起きられないというのは夜睡眠時間が少ないということか。

《秋吉委員》

アルバイト等があるからだと思う。

《小山部会長》

ほかの委員の方々の意見はないか。

《川瀬委員》

本当は健康組合や企業で保健師や管理栄養士を正規に雇って定期的に指導するのが一番良い。しかし、企業にも健康組合も厳しい状況であるため、うちの健保組合（6組合）では実施していない。共同事業ではセミナーを開催し、保健師の巡回指導を実施しているが、それは健康診断の結果の一部の人しかできてないわけである。昔、企業もいい時代は新入社員も100名～200名入ってきた。その頃は入社時に健康保険と年金の話をしており、健康に関する話も実施していた。今は企業でも10名採用するかなので、新入社員研修時に実施していない。食育は小さい頃育ったときからのものなので、食育に関してはお母さん方、作る側に特に力を入れていただきたい。我々も入社時点から生活習慣病の人がいるが入社時の健康診断はあまり詳しく調べないため、入ってから見つかる人がいる。それらも含めて企業と共同で実施しているがなかなか実を結ばない。もう少し長い目で見ないといけないかなと思う。

《小山部会長》

実際に職場の中では妻が専業主婦の家庭ではまあできるが、夫婦で働いているところや、独身の人の食べ物はスーパーやコンビニもあるし、時間が無い、と。残業ばかりだからおろそかになっている、という話が聞こえてくる。

《川瀬委員》

確かに家から通っている人は親が作ったものを食べているが、単身、独身者など家から離れて県外にいる人に朝食を食べてないというのがある。

《小山部会長》

そういう人たちに地産地消を伝えても仕方ない気がする。

《川瀬委員》

そういうところに保健師さんや管理栄養士さんの指導をして欲しい。

《小山部会長》

健診で糖尿病といわれると食事に気をつけるが、そうなる前には聞く耳が無い。そこをどうかしないといけない。

《江頭委員》

私はPTAだが子どもたちの朝食の摂取については、結構学校の中で先生方が話をされている。また、最近地域の団体長会議などに行くと、朝から校区の方々が子どもたちの登校時間に合わせて挨拶運動などがあり、「子どもたちの元気が無い」とか「あの子達は朝ごはん食べているのかな」という感じのことをいわれる。実際朝ごはんを毎日食べてくるという子どもは少ないと思う。先ほどから話のように親が朝から忙しい、前日夜遅いため子どもたちもどうしても夜型になってしまって朝起きられない、ご飯を食べられない、そのため活力が無い、という話もよく耳にする。子どもたちが朝から食べられないというのは親の勝手であり、子どもたちの責任ではない。もう少し責任を持って食べさせるのが一番重要なのではと思う。また食育に関して、地域に食育の担当の方がいらっしゃるが、回数がこなせないのが申し訳ないといわれる。年に1回程度、保護者と子どもさんと一緒に昔からの食べ物を実習し食育の活動を行っている。保護者も子どもと一緒に料理をやってすごく楽しいと言われる。本当はそういう機会が年に何回かあれば良いのだが、そうもいかない感じである。公のほうからも子どもたちと保護者と一緒に食事を作ったり、いろんなものを経験する機会があればと思う。地域の方たちの個人的な活動だけでは難しい部分もある。

《小山部会長》

保育園、幼稚園の側から感想・意見はないか。

《上妻委員》

低年齢の保護者には食育に関して知っているとか地産地消の言葉を知っているとかがいう数値が高めだが、保育園では子どもたちへの食育をすごく活発に実施しているため、その結果が数値に表れていると思う。今話があったように朝食欠食は保護者イコール子どもたちである。子どもたちに手をあげさせると現実にそういう保護者がいる。

それと私たちは市の資料とか研修会に参加させていただき、奮起させられている。そして、食育だよりとかそういう媒体を通して保護者にも伝えている。現実に30代、40代のとても忙しい中で朝食がとれないという理由は分かるが、子どもを持ったとき、子どもを通して食の大切さに気づかせるために、子どもは小さければ小さいほど食育の大切さを感じた。これからも良い研修を期待する。

《小山部会長》

保育園働いている母さんが多い。そういう点で保護者の人たちは分かっているけど実際やるのは難しいということか。

《上妻委員》

根底には、子どもたちのことを考えたら食育は大切ということはわかっていると思う。この前『早寝早起き朝ごはんシート』というものを市からもらって子どもたち対象で書かせた。子どもたちは「朝ごはん食べてきたよ」というのだが、何を食べてきたかという、ゼリーなどである。それでは〇がつけられないから今日は食べるといっている。子どもが言うところからのスタートではあるが、教育は大切だなと痛切に感じた。

《小山部会長》

幼稚園ではどうか。

《伊藤委員》

似たような部分があるが、保育園や幼稚園は日々食育に力を入れている。そのため子どもいる保護者はかなり認知度が高いのだと思う。今回のアンケートの目的はニーズと課題・問題点を見つけるためなので、その意味で保育園幼稚園、小学校で継続実施することで保護者の認知度も上がっていくということがわかった。これを見る限り子どもが必要だといったとき、親が応えられるかどうかが大変である。子どもは摂ろうとしているけど摂れないのか、子どもの摂る気が無いため摂らないのかが分からない。保護者が食育が大切だと分かっているのにやらないのか、わかっていないからやらないのかそのあたりが明確になってくるといろんな政策のやり方も変わってくるのかなと思う。

《木村委員》

朝食を食べる頻度は、保育園、幼稚園の取り組みもありまして、小学校までは欠食率が低い。他に例えば子ども自身が食というものを身近に感じるということでは、事例を挙げると、食生活改善推進員の清川さんの校区で子どもたちを集めて調理実習をされている。それまで好き嫌いがあった子達がそこに通いだして食というものに向き合い、好き嫌いがなくなった、と聞いた。

今、学校では5年生から調理があるが、もうちょっと低学年のときから実施できないのか。子どもたちが健康な食事を食べたいということは、親にも当然伝わるので、こういう取り組みがもっと広がって欲しいなという思いがあって、うちの記者に取材してもらった。地域で親の料理教室等もあるが、もっと子どもたちを巻き込むと親も子どもたちも意欲が出てくると思う。施設としては公民館、コミュニティセンターなどや学校にも給食を作るところや調理室があると思うし、教育委員会も含めて実施してはどうか。全国一律の形では難しいかもしれないが、熊本独自のものを積み重ねていくというのが必要ではないかと思う。高校生くらいから欠食が増えているというのは県が2009年に調査した中でも小学

校で 90%、中学生が 86%、高校生が 75%で、高校生は 4分の1 が食べてないということがわかっている。それが 20代、30代の食べない予備軍になり加速して食べなくなるのではないかと気がする。高校生くらいが難しいだろうが、ターゲットを絞って対策を練って色々考えてみて、どうやったら実効的な形につながっていくのかと作戦を考えていく価値はあると思う。

《事務局》

議題 2 第 2 次食の安全安心・食育推進計画骨子(案)について(資料 2、3、4) 説明

《小山部会長》

食育と一言と言っても乳幼児から高齢者まで年齢的に幅広い。熊本市民の生活のスタイルというのも様々なので難しい点がある。しかもそれが周知から実践へというのが今回のテーマであればなおさら知ってはいるがしないというなら、しないのならば知らないのと同じということである。それをどう具体的に取り組むのか皆様方に知恵を出していただきたい。

問題を絞りながら進めて行きたい。まずは保育園、幼稚園、小学校での食育の指標を意見をもらいながら、かつ具体的にこうすればいいんじゃないかということまで話を進めたいと思う。

《上妻委員》

保育園としては、子どもたちと給食との仲のよさが食に対しての関心度の高さにつながっていると思う。うちの園は本当に子どもたちと給食室との仲がいいし、給食室と保育士の仲がいいと自負している。そのため食育は非常に活発で、子どもたちの残食率は3歳以下がほんのちょっとあるくらいでほとんど出ない。市の献立なので野菜が皿いっぱいあるが、子どもたちはそれを食べてしまう。食育については子どもたちを通して、またおたよりを通して知らせていこうと、園全体で取り組んでいるところである。

また、これほどの密度の高いアンケートに回収率 60%というのはすごいと感心した。食育に関して関心が高い体と思う。アンケートはすごく大切である。答えなければいけないと思うとそれが行動につながる。気持ち芽生えるという意味では良いことだと思う。保育園としては保護者対象の研修会を実施している。東北大震災のときの放射能の話は30分くらいしたが、それから地産地消の大切さに目覚めたお母さん方のご意見を聞いた。地道な活動が大切である。子ども達は私たちがこうだと言えば 100%真に受けて取り入れてくれるため、子どもに対しての指導も継続していきたい。

また、このアンケートで思ったが、私自身、独居老人を抱えているが、うちの姑は食事が楽しいかなと考えたときに、楽しくない食事をさせている現実がある。保育園は地産地消を推進しているし、できるだけ国産のもの熊本のものを使っているが、自分自身を考えた時に、4人の男の子の子育てがやっとな終わるかなと時期だが、質より量になってしまう。大切なのは分かっているができないというジレンマが確かにあると思う。

《伊藤委員》

その通りだと思う。この計画を立てるにあたってどういった方向性で作るのが明確でないといけな。福祉的な感覚で考えるのか教育的な感覚を中心に考えるのか、もちろん両方とも必要なのは当たり前だがどちらが中心なのかなと事務局の方々考えられているのかお聞きしたい。これを読む限りは第2条のところに健全な食生活の実践とあり、人間を育てるとも書いてあるので、中心は教育という面なのかなと考える。そうであれば給食ももちろん大事だが、家庭とか子どもたちの自分たちで考えてできるような状況にすることが重要だと思うのでこの 21 ページにあるような学校・保育所・幼稚園等における食育の推進というのが重要だと思う。幼稚園としても市が今後進めていくにあたって協力していかなければならないと思う。今、計画策定の部分では幼稚園の策定率は若干低いですが、どの園も実際はやっている。ホームページなどを見てもらえばどの園も取り組んでいるのが分かってもらえると思う。必要で

あれば取りまとめて提出することも可能である。

《小山部会長》

5 ページのところですが、『幼稚園における食育に関する計画策定の割合』達成、『小中学校における食育に関する計画策定の割合』達成、下の方の『学校農園や休耕田等を活用した栽培活動を実施している小中学校の割合』も達成、『地産地消を認知している市民の割合』も達成なども、達成している項目について。達成しているからもういいと思われるか、中身はまだまだだと思われるかどうか。

《森田委員》

小中学校では教育委員会のご指導の下、指標にありますものに関しては達成している。食育に関する計画策定の割合に関しては、策定が実際計画通り実施できているかどうか、質が問われるのかなと思う。策定はしているがそれが子どもたちの食に対する理解につながっているのかどうか問われていると思う。小中学校での取り組みが保護者に伝わっていないということであれば、各学校でも引き続き食育を推進していかなければならないと思うし、児童・生徒自体の食を自分で考える力とか実践していく力というものをもっと高めていく必要があると思う。先ほど子どもが食べないのは保護者の責任という話もあったが、その中で、自分で食事を作り食べてくるという力も子どもたちにつけてあげたいと思う。そういう意味では食事バランスガイドというものがあるがこれについては学校ではまだまだ認識していないと思う。その辺りの理解を教職員を含めもっと知らせていくのも大事だと思う。

《事務局》

今後も周知については継続し、それに加えて実践に力を入れないといけないと思う。今までの取り組みも踏まえながら、関係各課と協議していく貴重な材料にしたいと思う。

《小山部会長》

先ほど話しがあつたが朝ごはんを食べないから昼完食するという子どももいると思う。保護者としては学校でバランスのいい食事を出してくれるから朝ごはんは手を抜くということはないのか。

《上妻委員》

保育士の中にそれを感じている者がいる。保護者の方も、家では野菜は全然食べないけど保育園でこんなに食べてくれるから保育園だけが頼りです、という意見はがある。先生たちが食べさせるような技のようなものがあるので、ということもある。

《小山部会長》

お母さんたちは日頃仕事をしていて忙しいから休みのときは、外食になってしまう。お母さん自身の認識がもう少し目標を達成してない気がする。

《中川委員》

上妻さんの話を聞いていて、とてもいいと思ったが、やはり保育園や幼稚園の小さい子は先生たちから「ご飯を食べると大きくなるんだよ」とか聞くとほんとに素直に信じて、帰ってからお母さんに言っている。親の教育も必要だが、親より子どもに対して、幼稚園・保育園・小学校あたりで授業の中で朝ごはんを食べることを力を入れていってもいいと思う。朝ごはんを食べない子どもは、朝ごはんを作らない親になる可能性がある。虐待の連鎖は子どもが親を止めることはできないが、食に関しては子どもが親を教育することはできると思うので幼稚園・保育園・小学校くらいで是非その点を教育してもらえば良いと思う。中学生に関してはそれが難しいと思うが、中学生は簡単なものでいいから自分でご飯を作る楽しみというものを授業の中で教えると良いと思う。

《上妻委員》

実際に私たちから変わらないと子どもたちも変えられないと思う。

《清川委員》

実は私はこのアンケートが来て答えたのですが、改めてアンケートというものは自分を見つめなおす

きっかけにもなると思った。アンケートを書く事で食育を意識することが出来た。

《小山部会長》

20代、30代はダメだと言っているが、20代、30代になったら駄目なのか、今の子どもたちも20代、30代になったら駄目になるのか。今きちんとした食育の知識が入っていれば今の20代、30代みたいにはならないだろうという期待がある。子どもたちに朝ごはんを食べたらいいよ、というキャッチフレーズはないだろうか。

《上妻委員》

うちの園で、一ヶ月に1回始まりの会というのが月初めにある。そのとき、給食室からも出て子どもたちにお話をするのですが、その時に食育に関する健康の話しをする。教育的に話しをするのではなく、子どもとの会話の中でするようにしている。それを保護者向けに、ジュースの中の砂糖の量を実際に入れて広報をぶら下げておく。それを見て子どもたちとお父さんお母さんのやり取りができるように心がけている。

《小山部会長》

食事を摂ることについて心を動かすためのキャッチフレーズがあるとよい。男の子なら、「朝ごはん食べると強くなるよ」とか、女の子には「朝ごはんを食べるときれいになるよ」など。理屈で説明するより心を動かすようなものが欲しい。

学校時代は教育委員会や先生が一生懸命やってくれるから比較的うまくいくが、高校になったときに給食がなくなる。以前調べたことがあるが、女性の骨密度を調べたら中学生のほうが高校生より高かった。高校生になると牛乳を飲むと太るということで飲まなくなる人がいる。また、20代の大学生になってくると特に女子学生というのは食べる事に関心はあるが、ダイエットを意識してしまう。なにか意見はないか。

《秋吉委員》

確かに幼稚園・保育園・小学校・中学校までは栄養士などの食に関して教える人がいるし、高校も家庭科の先生がいるので少しは教育がなされているかと思う。問題なのは大学と企業ですね。社会人になってから、穴が開いてしまうと思う。

私がいるところは常に学生に食育を行っているため、他大学の状況がどうかというのが気になる場所である。管理栄養士を養成する施設として何か他大学へ食育に関する情報提供などで協力できる部分があればしていきたい。職域に関しても学生の力というものを熊本市と協力していけるものがあれば是非ご協力させていただきたい。

《小山部会長》

まさに食に関する空白世代で食生活に関して関心が薄くなる時期なので、今その人たちをどうするかというのはみんな考えて欲しいと思う。健康保険の問題と絡んでくるため、特に食育を中心に勉強している学生さんたちがボランティア活動のような形で、あちこちに行くようなことができないかということ市の方から要請していただきたい。

《清川委員》

先日の食育月間のとき、上通り入り口で食育キャンペーンを実施した。そのキャンペーンで尚綱の大学生と一緒にチラシ配りをしたのだが、若い年代の人がチラシを配るともらってくれた人が増える気がした。また、その若い学生さんがその前に食育を勉強するわけなので、年に一回でも参加するとより関心を持ってくれるのではないかと思った。

《小山部会長》

熊本市はがんの受診率が低い。がん撲滅運動というものが盛り上がってきている中で若い女性たちをどうするかといったときに、大学の若い学生さんたちがボランティア活動でそういうグループを作って

自分たちでどんどん広めようということで、各大学の学長さんたちも是非やろうという事になっている。食育の分野でもその方法はどうか。以前私も栄養士の卵や保健師、看護師の卵、医者のお卵が集まって一緒になってやっていた。そういうのを育成していくと学生たちの成長にも良いような気がするし、地域社会に貢献する喜びを感じさせることもできるし、熊本市としてもその取組を進めていくと良いと思う。そこで、ほかの団体、とくに健康保険連合会や地域婦人会とか老人会とかと連携をとっていくことができないかと思う。今やっているのは熊本市が行政としていかに食育を推進していくかということだが、基本的には市民の問題である。熊本市が先頭にたってやっていると市についていけばいいという事になって、いざ予算が無くなったというときには出来なくなってしまふ。予算を組んでやっているけれども、あくまでも後押しであって支援する市民運動として位置づけてできないかなと思う。食生活改善推進員（食改）というのは何人いるのか。人数的に十分に熊本市を網羅できるか。

《清川委員》

目標としては100軒に1人であるが、今熊本市に650人である。例えば、西原校区では6,000世帯なので目標60人となるが、実際は22人である。熊本市に食改ができたのは河内と合併した後（H2年）なので、この頃は低栄養ではなく食生活は豊かになり、塩分を摂り過ぎないように、油を摂り過ぎないようにということで栄養が行き過ぎてるのを減らしましょう（増やそうCa、減ら脂NaさE）という活動からのスタートだった。

《小山部会長》

他、市民運動としてのボランティア組織をとという点ではどうか。

《中川委員》

具体的にどうこうというのは思い浮かばない。新しい指標はかなり整理されていて項目が少なくなったのは分かり易くていいと思う。

質問だが体系の案や指標の中にもでてくる、市民運動としての食育の推進の中に食育支援団体のネットワークの整備というのは構想としてはどういうものをイメージしているのか。

《事務局》

食育に関する協議会としてはこの推進会議があるが、保育園・幼稚園と子どもに関わる小学校・教育委員会、地域の食改さんたち・主任児童員さんたち、子どもに関わる団体で子どもの食育ネットワークという協議会があって年に数回、研修会を実施している。去年まで5つの保健福祉センターで調理実習や研修会をしている。その中でそれぞれの取り組み報告だとか地域活動の取り組みの報告など行う子どものネットワークがある。

今もそれを推進しているが、記載もあるとおり、今年4月から区役所になり熊本市が小学校区を単位として健康まちづくりということで健康をキーワードにまちづくりを進めている。食を通じた地域の活動、子どもに関わる団体のネットワークと今後の体制を協議中である。結論なり方向性までは事務局として出していないが、今までの実績もあるため組み立てて連携協力体制が進んで食をみんなで考える仕組みが少しでも推進すればと考えている。

《中川委員》

体系案の方の施策の方向性の中に職場等における食育の推進とは全くリンクしないということか。今言われたのは子どもを対象とした関係団体ということなので、職場や地域のサロンとか民生委員や児童委員などとはちがうのか。

《事務局》

まだ明確になってはいない。熊本市も長年健康づくりには取り組んでおり、食以外の部分で企業にどう取り組むかは非常に課題になっている。健康づくり全般の計画に「健康くまもと21」という計画があり、職域をどうするのか研究検討が同時並行でなされている。そちらの状況も踏まえながら考えてい



く事になると思う。大学とか企業をどうするのかということもある。6月の食育月間に県庁や九州農政局と区役所で協力しながらいくつかの企業・大学に出向いて周知活動をやったがまだ全体化はしてはいない。今までの取り組みも踏まえて全ての学校やたくさんの企業に広げて強化したいと思う。学校や職域も地域の校区になったときには重要な社会資源になるのでそのあたりともぜひ協力して取り組んで行きたい。

《中川委員》

今の話に関連して、体系図の中に「職場等における食育の推進」や「高齢者の食の自立を目指した食育」とか去年から意見してきたことが反映されていて心強く思う。高齢者の食の問題をサポートできるような広いネットワークの体系ができると良いと思う。

《小山部会長》

学校や幼稚園・保育園などでの農業体験とか体験型というのがあるが、意見はないか。

《森田委員》

市全体では実施している学校が多いと思う。

《小山部会長》

今のままのスタイルでいいのかとか、別のやり方があるんじゃないかとかということの問題提起したいと思う。

地産地消の話は、学校の給食ではほぼ地産地消に取り組んでいる結果が出ている。

《伊藤委員》

幼稚園の給食は委託の園も多いが、大体の業者が地産地消を実施している。農業体験もどこの園もされていると思う。

《小山部会長》

30ページの終わりくらいにごみ問題というものがある。ごみの中では生ごみが非常に多い。作りすぎ、食べすぎ、買いすぎというのがあって無駄なごみとして捨てられているということがある。これを減らすために方策などはないか。

《清川委員》

私たち食生活改善推進員が協力して、毎年第二高校で地元の野菜を使った調理実習を実施しているが、学校側でも廃棄物が残らないようにと指導されていた。

《小山部会長》

生ごみはどうしたら減るのか。最近はスーパーでも少人数の食材が売ってあるが。

《清川委員》

安いからとたくさん購入した結果、使い切れず、廃棄してしまうことが時々ある。それが、ごみを増やす結果になっている。高齢者へ話をする時に「高くても食べるだけ買しましょう」と言うようにしている。

《小山部会長》

そういう指導も食育の指導・啓発の一つだと思う。

《木村委員》

高齢者についてはこのアンケートで調査項目が絞られていると思うが、高齢者の実態のようなところが見えない部分があるので、もう少し高齢者の食からの健康が分かる指標みたいなものについて知恵を絞っていただきたい。最近コンビニで高齢者を対象にした弁当を作られていたり、地域でお年寄り用のお弁当を作られている校区がある。NPOでお年寄りのために団地に場所をとって食事を提供し、みんなで食べる場所も増えている。参考になるような取り組みが他にあると思うのでそのあたりの知恵をみんなで出し合えるような場というものを骨子に含めて欲しい。

### 《小山部会長》

新しい熊本市を作るためには、市民が参加するということが大事である。熊本市はそれを下から支えていくという形のものがないか。そのためには既存の NPO やボランティアを支えて知恵を出すということが大事だし、何かやるには人が大事なので人づくりという意味で食改さんや、若い人には若い人をという意味では学生さんのボランティア活動を盛り上げていくということも必要だと思う。行政だけでなく学校の知恵、産業界の知恵を一緒にして食に関する問題を取り上げていくことを考えないといけないと思う。

### 議題3 特になし